SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

本会の誕生の動機を回顧する

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-09-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 正辰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025735

静岡地学　第27号（1974）

本会の誕生の動機を回顧する

竹　内　正　辰*

「静岡地学」の10周年をむかえ、心から祝福します。「静岡地学」の前身から発展してきた動機については、古い方だけが御存知だと思いますので、10周年を記念するために、その経緯についてのべようと思います。

「静岡地学」の前身は「地学しづはた」でした。これは静大地学教室（文理学部・農学部・教育学部）の先生方と学生が協力してつくった組織でしたが、元来のスタートは当時の学生の意欲に満ちた熱望によるものでした。機関紙として創刊号を1953年3月に発行しました。終戦後の田畑を埋めたてて建設された静大教育学部の大岩校舎からは、賤機山の緑の姿をながめて、殺風景が少なからず慰められたものでした。この山の珍しい岩石や安倍川と静岡平野を区切って北の竜爪から馬背状に細長くつき出た尾根の面白さに興味を持たれていた望月勝海先生が機関紙名を「地学しづはた」と命名され、その第2号の扉には、「石や雲あいてに心はなけれどもよき人つどう地学しづはた」と、先生自身が詠っておられます。先生は稀にみる読書家でして、専門書ばかりでなく広汎な領域にわたって読書され、絶えず書評の話題を賑やかされた方でした。学界に残された業績も多く、大正14年水戸高等学校の生徒時代に地球第3巻に、「南部阿武隈山脈の地形考察」を投稿され、昭和3年東京帝国大学理学部地質学科を御卒業後ただちに金沢第4高等学校に赴任され、昭和6年には「地質学入門」を上梓されました。昭和38年11月不治の病に侵されて、残念にも58才で逝かれましたが、一生を通して書き残された著書15巻、学術論文50余編のなかには、学生時代から学窓を出られてすぐにも書かれた立派なものが後世に残されていますし、昭和18年に上梓された「大東亜地体構造論」は、先生の最もお得意とされた地体構造論を独特の論旨によって展開されたものです。

学生が地学研究を愛好したのも、このような大先生がおられ、幸いにも名講議によって啓蒙されていたからでしょう。それに加えて佐々倉航三先生がおられたことも忘れることができません。「地学しづはた」創刊号には、カントの名句を引用されて、自然科学に精進するものの態度・心境をいましめられました。先生は気象学の専門家でして60編に達する論文を残された一方、話題の豊かな方で随筆を得意とされ、あらゆる雑誌にその都度々々感想をのべられて自らおたのしみでした。小鹿に大分永く住居をかまえておられた関係で、「小鹿物語」と題された随筆集が亡くなられたあと昭和41年に発刊されました。先生は「静岡地学」創立時の会長として本会のために御尽力下さいました。

「地学しづはた」はこうした立派な大先生を中心として、地学研究がもりあがったことから始まったのでした。最初は学生自身が謄写原紙を切り苦労したものですが、努力の甲斐あって、体裁の割合によい冊子の姿で分配されたものでした。会員といっても、わずかの学生数と先生のことですから、印刷所に依頼するほどの経済力はありませんでした。ただ存続させたい希望がつよく、学年始めごとに卒業生と新会員学生の数の増加を喜んだものでした。苦しい運営を続けながらも、毎年3回の発行を継続し、第9号発行の昭和31年1月、はじめて謄写タイプ印刷に進歩しました。これで学生諸君の労苦は解除

*　本会前会長　岐阜教育大学

されることになりました。

それから「地学しづはた」と別に「おおいわ」と名づけられた会誌がありました。これは静大地学卒業の同窓生の組織した会「おおいわ」の機関紙でして、教育学部第1回卒業生の構想で、昭和29年11月に創刊号が分配され、毎年1回発行して、会員のフィールド巡検感想、地学教育上の研究・諸報告などを連載して、もっぱら会員相互の親睦をはかった会誌でした。会名「おおいわ」は、昭和32年9月の総会で「静岡大学地学会」に改められ、運営の方針を私は「おおいわ」3号（昭和32年9月）21頁に、"「おおいわ」と「しづはた」の関係"と題して次のようなことを記しました。それは、

1. 「おおいわ」会が将来静岡地学会として発展する希望から、差しあたり「静岡大学地学会」と命名し、改めて発足をはじめる。
2. 県内に静大地学卒業生ばかりでなく、同好者が全般的にふえることを希望して、近い将来に「静岡地学会」を誕生させたい。
3. 会誌「しづはた」は学術的研究論文を主として掲載し、全国主要大学地学教室その他に配布し、学術誌として継続発行し、「おおいわ」誌はこれに準ずる論文あるいは気楽な考想を掲載して会員の親睦をはかることを目的とする。そして「しづはた」は地学本質のテーマを研究した論文に主をおき、「おおいわ」は地学教育についての内容を大巾にとり入れたい。

このような方針で年をかさねましたが、地学教育法についての記事も、多くの会員によって、毎号連載され、会誌の目的もはたせた感がありました。遂年の会員の増加も加算されて、両誌ともに充実し、地学に対しての県内関係者の関心は一層大きくなってきました。そのころ、それまでに期待していた静岡地学会の結成の話も頻繁にもりあがり、ついに昭和39年5月30日、6月20日に有志による結成準備会がもたれ、6月28日結成大会に進み、ここに「静岡県地学会」の名称で本会が発足することになりました。

当時の県内の教育界の情勢をうかがいますと、各地・各地方にありました教科研究会、部会などが統括され、会の整理統合などが大々的に組識されまして、地学科の研究部会など新設できるような空気は毛頭ありませんでした。私どもが「静岡県地学会」の結成を希望した真の動機は、理科に対して地学科が軽視されていたということばかりでなく、大戦後にとり入れられた地学が、理科としてはまだ物・化・生にくらべて余りにも歴史が浅く、一般教員に認識されていない向きも多分にあることを嘆いたことにあるのでして、当時の一般理科と歩調を共にしてゆくには余りにもみじめな情勢にあったからです。

幸い私どもは、この文の冒頭にのべましたように、学問的にも、人格の上でも実に立派で、誰にも追随をゆるさない大先輩の教えを受けていますし、そうした力強い信念が今日の「静岡県地学会」を誕生させた原動力になったと考えます。時移り人変るのは世の常ですが、誕生初期の精神がつたわってこそ、初心を完うすることができることと思います。本会の躍進を祝福し、会員の皆さまの一層の御精進を祈願申しあげる次第でございます。